

宿命、あるムーブメント

源川まり子

喧騒のなか

丘の上の小学校は統合が決まったという

水滴は屈曲したガラスの側面に道をつくり

そうして生まれた境界を一途にみつめながら

時間をかけてストローを噛み潰す

ついでのように臍のあたりに力を入れると

しなだれた腹の下でなけなしの筋肉が硬直するが

なにか密やかで動的なもの

無意識のうちに空白になる器のような

進行形の圧迫感が喉元をおそう

本来であれば

手をじかに握りながら

伝達すべき祝福を

与えることができない

それは誰が決めたわけでもないが

何度考えてもやはり交点は暗闇であって

周回する世界の端は虫眼鏡をのぞくように

こちらの擦り傷をうつしながら

やがて目の前を曇らせていく

すべてに対して凡庸な語りかけ

今日も

裸足になって

水に飛び込むんだそうだ

ちょうど臍のあたりが再起する重みとなって

臀部から沈んでいくのを想像する

なだらかな点滅（私もまた、誕生の瞬間）

体の一部が失われ、損なわれていくことの

限らない喪失が

はらはらと落ちてくる

欲望する、あるいはとても激しく

（生まれ落ちた存在であったというなら）

振り払うことも、手放すこともできないまま

一緒に旅に出ることにする

がらんだりの街で

音もなく隣に立って

そうしたら 道に沿ってひらく

しんとした部屋の、敷布のなかで

ともに音もなく数を数え

炎をうつすように

瞳を覗き返すことができる